

富山県文化審議会委員※へのヒアリング結果(概要)
※第2回審議会欠席委員、新任委員

(委員は五十音順)

委員名	発言内容
内 山 委 員	・ふるさと教育や八尾の「おわら」など、全国に誇れる文化をこどもたちが小さいうちに触れさせることが大事。 ・県民が文化芸術に親しむことも大事だが、海外の人に紹介することも大事。外からの人に評価されることで、地元の人々のプライドが醸成されることにも繋がるため、多言語化の看板やパンフレット、動画なども大事になる。 ・こどもたちが文化芸術に触れ親しむには、地域の中で育む、もしくは地域の人たちが学校に入り混むなどの工夫が必要。
三 宮 委 員	・県内の20～30代の若手アーティストは沢山いるが、個人で活動している人が多い。 ・今の若手はインターネットが当たり前で育ってきているため、若手アーティストはネットを使う。 ・個人で活動しているアーティストをアーツカウンシルでデータベース化すれば、個々の活動が可視化され、活動機会の創出や、企業など協賛者からの活動支援にもつながるのではないか。 ・アーツカウンシルでプラットフォームを作成するのであれば、個人の作品をネットで売れるようにできればよい。 ・若手アーティストを教育の場に積極的に関与させることで、こどもたちが文化芸術に親しむ機会が増えると考えられる。 ・「インクルーシブ」もキーワードの一つであり、障害者アートもやっていくのがよい。
島 添 委 員	・アーツカウンシルを動かしていくためには、実働部隊として働くことができ、交渉役となる人材が必要。 ・アーツカウンシルは一般的に芸術に偏りがちだが、伝統文化も取り入れていけば、「富山型アーツカウンシル」の色が出るのではないか。一方、対象を広げ過ぎると「あれは文化なのか」という声も出るので、線引きは難しい。
藤 井 委 員	・芸術は特殊なものではない。日常の中にあるものとして、生活の中にアートが入ってくればよい。 ・10人いたら10人のアートがあることに気づいてほしい。 ・企画展をやっていない期間に貸館として県の美術館や博物館で何かできないか。目線を低くして活用することができれば、みんなの美術館・博物館になる。 ・企業から芸術や美術に寄ってきてもらえる窓口があったらよい。 ・作品の展示・鑑賞ができる場所があるとよい。
宮 崎 委 員	・文化も変化に対応していくことが必要。時流に上手く乗り、ターゲットに刺さる仕掛けをしていかないと文化芸術は発展しない。 ・文化を守るためには収益を生み出す仕組みが必要。文化芸術で稼ぐことができれば文化芸術団体の会員が増加し、会員のやる気向上につながる。 ・例えば、人が沢山寄ってくる場所や今までと違う場所で茶会をすると、一般の人が茶の心を知るきっかけとなり、誰もが文化に親しむことにつながる。 ・国宝や重要文化財を映画のロケ地として活用することにより、県民に文化資源を知ってもらう機会が増え、誇りの醸成につながる。活用された文化施設を発信することにより、県外からの来訪も増える。
米 田 委 員	・高齢化社会、共生社会を見据えた環境整備として、利用者目線の対応が不可欠。 ・物理的な環境だけではなく、障害のある人が来た時の対応やどう声かけするかが大切。 ・「おもてなし」の環境がないと、良い企画を作っても障害者が美術館等に来ることができない。 ・文化が多様化して、美術館にこだわらずに文化を楽しむ形態になっている。若い人は体験や思い出を持って帰りたいので、ワークショップが馴染む。 ・富山型デイサービスのよう文化も富山型でよい。マイノリティばかりになるのではなく、多様な人たちがどんどん増えていくのが楽しい。 ・個人で活動するアーティストが活躍できる場も必要。 ・3万円くらいのコンパクトな助成金があると使いやすい。 ・アーティストを支える人や育てる人がいると、芸術は長続きする。 ・アーツカウンシルはキーワードがあるとわかりやすい。例えば、「継・結・創」。「継(けい)」は、伝統文化を大切にし、新しいものも継続していくことで新たな伝統となる。「結(けつ)」は、人と人、今までにないジャンルとジャンル、古今などを結ぶことで、新たなスタンダードを作る。「創(そう)」は、新しい価値づくり。地域でもそういう方向に意識が向き、それぞれのジャンルが輝いていくとよい。 ・アーツカウンシルはプラットフォームのイメージ。県内で取り組まれている文化芸術活動等を知る場。企業がその活動を知り、支援するということに、企業がアートをすくい上げることが必要。 ・それぞれの文化資源の魅力や特性を活かした連携が必要。